

2. 寄稿：ゴリラからのメッセージ、再び

(郵政建築研究所／アトリエ・アーキポスト^{かんのんかつひら} 観音克平)

自然を探究することから科学が生まれ、その中から、数多くの学問分野が派生した。芸術（美術、音楽）や文学も、自然の中での人間の営みや願望を追求し表現するという意味ではこれに含めてよい。人間の叡智には限りがある。そのちっぽけな頭で、宇宙、あるいは大自然の現象のごく一部を解明した（と思っている）にすぎない。したがって、時代とともに、自然の捉え方が変われば、その認識あるいは、対応の仕方も当然変わってくる。われわれに身近な経済学、工学あるいは建築とても同様である。異なるのは、それらが、ほとんどすべて実用を目的として成り立っているということである。

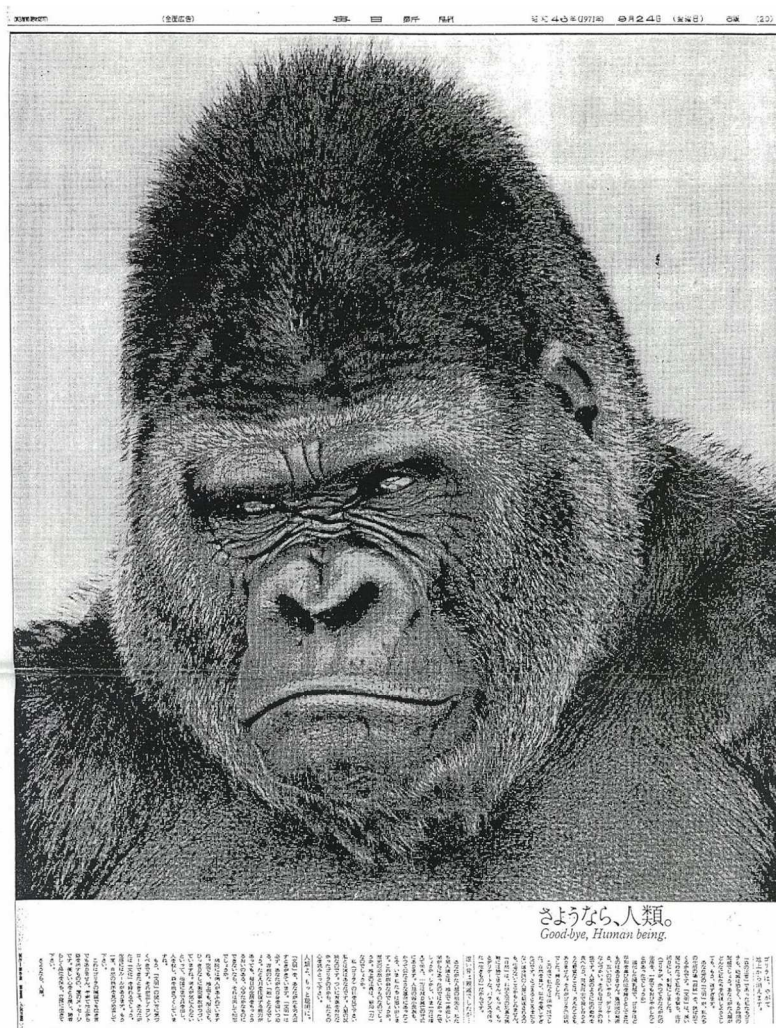
元来（とくに西洋においては）、パスカルに見られるように自然科学全般が、「神の摂理」に近づきたいという人間の敬虔な欲求に根ざしていた。しかし、「神が死んでしまった」（？）今日では、その謙虚さが失われ、派生した各分野の研究だけが、全体像とは別に、どんどん細分化し、深化している。バイオ・テクノロジーや遺伝子工学に見るように、人間は大胆にも自然の仕組みを操作することに挑戦しているが、恐ろしいことに、自然の設計図に手を加えることの危険性を顧みていない。急速な勢いで進んでいる AI の濫用、然りである。

「地球にやさしい」という言葉が使われはじめて久しい。ところが、現実はその反対で、人間は、ますます地球を傷めつけ、自滅の道を突き進んでいる。地球を一つの有機体と考えれば、これらの人間の行為に対して、何らかの拒絶反応があるはずである。「地球からのしっぺ返し」である。事実、ここ数十年に限ってみても、地震、噴火、洪水、高潮、冷害、旱魃（かんばつ）そして昨今の猛暑（いや酷暑とか）など、地球の異常現象は枚挙にいとまがない。これに、人間由来の酸性雨をはじめとする大気汚染、温暖化、砂漠化、オゾン層破壊、森林破壊、生態系破壊などの環境破壊、さらに各地で問題となっている建築・街並み破壊とが加わり、まさに事態は切迫している。

これにつけて、鮮明に思い起こされるのが、今から半世紀以上も前の新聞（『毎日』1971年9月24日付）に載った有識者による一面広告である。口をへ字に結んだゴリラの悲しそうな顔の大字しの下に、「さようなら、人類。」というタイトルで始まるメッセージが添えられていた。先の万博（1970）が終わり、高度成長にもかげりが見えはじめ、多発する公害が紙上をにぎわせていたころである。環境庁が発足したのもこの年である。

この広告は、次々と環境を破壊してはばからない人間の横暴に警鐘を鳴らした。しかしそれから半世紀、残念ながら、ゴリラの訴えに耳を貸さないまま今日に至ってしまった。喫緊の問題は、先に述べた異常現象に加えて、震災、津波、豪雨、台風、竜巻、また、人為的な環境破壊からくる温暖化、それに伴う海面上昇・赤潮、山火事、原発事故（放射性物質による汚染）、昨今のパンデミック（各種ウィルス感染の世界的蔓延）である。そして今、日本はもとより、世界各地で報じられている異常な酷暑も然り。地球の怒りと「しっぺ返し」はますます激化している。

《人類よ、もっと聡明に》ゴリラは叫んでいる。《「文明」を、あなたがたも考え直すときがきています。「文明」は必ず、あなたがた自身を追いつめる容赦のない「敵」となるでしょう。》と。



ゴリラは、文明過信の人間の驕りを戒めている。現代文明が人間の欲望を何でも可能にすると思うのは大きな過ちと指摘している。滅びゆく種の代表としての悲痛な叫びである。

同じことが、我々のかかわる建築についても言える。現代文明（人間不在の合理主義）とバブル経済の後遺症（恣意と放縦）が、あちこちにその醜い姿をさらしている。日本各地で進行する、再開発という名の環境破壊である。一例を挙げれば、今物議をかもしている中野サンプラザの放置、さらに身近には、前田旧侯爵邸取り壊しに代表される鎌倉の別荘文化破壊である。ゴリラならずとも「建築文明」の末路を見る思いがする。今からでも遅くない！襟を正して「建築文化」の原点に立ち戻って考えるべき時が来ている。

ゴリラはこう結んでいる。《もう一度、自然の秩序を見つめ直して下さい。これは、ゴリラの嘆願でも泣き言でもありません。やがて地上から姿を消すものの、愛のメッセージです。さようなら、人類。》

補：本寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載